



festival

バーデン=バーデン祝祭劇場の復活祭音楽祭の代わりもオンラインで

バーデン=バーデン祝祭劇場の第1回デジタルフェスティバルについては、5月号の特別記事でレポートした。その後、復活祭には毎年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を招くのだが、新型コロナ感染状況を鑑みて、1カ月後に延長し、ディアナ・ダムラウらを招いて第2回のデジタルフェスティバルを開催した。しかし5月も状況は改善せず、2年連続で復活祭音楽祭は中止となった。代わりとして、キリスト昇天祭から4日間、地元のSWR交響楽団を軸に第3回が企画されたのだった。

5月13日は当楽団員によるストラヴィンスキー「八重奏曲」と、マルティン・シュタットフェルトを迎えたシューマン「ピアノ四重奏曲」だったが、とくに後者が秀逸だった。

14日はベルトラン・シャマユをゲストに、メシアン《世の終わりのための四重奏曲》を、1時間弱にわたり演奏を交えて解説したあと、全曲を通奏した。第二次世界大戦中に捕虜となったメシアンが収容所で作曲したときの状況まで想像しながらの解説は興味ぶかく、曲への理解も深まった。

15日はアントネッロ・マナコルダが指揮するフル・オーケストラ (SWR響) が、イェルク・ヴィトマン《コン・プリオ》で当楽団の強みを見せたあと、ソプラノのヴェロニク・ジェンスを加えてベルリオーズ《夏の夜》を好演した。「《幻想交響曲》の対極にあるこの曲は、匂いだけを表現したい」と語るマナコルダと、1989年に共演してからの知り合いだというジェンスは、母国語で匂い立つ世界を構築した。

最後のベートーヴェン「交響曲第7番」は予想を大幅に上回る名演だった。レガートとリズム感を両立させ、押し付けることなく、ドラマ性が表現できたのは、音楽的緊張感を持続し続けたからだ。第4楽章でテンポが滑ってしまい、効果が薄れたのだけが残念だった。

最終日は同楽団員によるラヴェルの「弦楽

四重奏曲」、フルートそしてクラリネットを伴奏に持つハーブのための「序奏とアレグロ」が幻想的な美しさを聴かせたあと、シェーンベルク《浄夜》では、深層心理に語りかけてくる怪演を聴かせた。(中 東生)

